opusdei.org

聖ホセマリアのエピ ソード(2)友情

創立者である聖ホセマリアの 人柄を浮き彫にするエピソー ドをシリーズでお伝えしま す。

2025/10/21

聖ホセマリアと個人的に知り合いになった人の多くが共通して口にするのが、「聖ホセマリアは友情を培う点において本当に優れた人だった」ということです。それは単に社交的であるとか丁寧な物腰であるとか

ユーモアのセンスがあるとかいうことではなく、心からの友情を感じります。家を訪問した。家を訪問したり、仕事は順調かどうか、気は元気なのか気にかけ、手伝えるとがあれば手を貸し、必要であればその相手を庇うことを厭わないにする人でした。

そんな友情を味わった者の一人が若 い司祭ペドロ・カンテロでした。彼 が聖ホセマリアと出会ったのは、 1930年ごろのマドリッドの大学で す。二人は若い司祭として博士課程 の勉強をしていました。ペドロは 1931年8月14日の夕方のことだっ た、と40年以上も経ってから思い出 を語っています。「いつものように 暑い夏の日でした。ホセマリア神父 が久しぶりに家を訪ねてきまし た」。夏の休暇を終えてマドリッド に帰ってきていたペドロ神父は、い かに自分の過ごした夏休みが充実し

ていたのかを語りました。本に囲ま れて幸せそうに博士論文執筆のため の素晴らしい文献を手に入れ、完成 のめども立ってきたことを話してい たのです。そのとき、ホセマリア神 父は言いました。「おい、ペドロ、 君は随分エゴイストになっている。 自分のこと、自分の研究のことで頭 が一杯だ。目を開けて見てご覧、今 の教会、そしてスペインの状況を。 君も私も人々に仕えるために司祭に なったはずだ。君の論文?君の文 献?今はもっと別のことに、もっと 重要なことに目を向けるときだ ろ1。はっきりとした、厳しい、で も心に響く言葉でした。1930年代の スペインは混乱の時期で、教会は各 地で焼き打ちにあい、国内の世論は 真っ二つに分断されていたのです。 この夏の終わり、ペドロ神父は論文 の執筆を中断し、教会の人々を助け る仕事に取り掛かります。こうして 彼の人生は新たな方向に向かって動

き出し、彼は後にサラゴサ教区の大 司教になるのでした。

硲恵介

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/sei-josemaria-episode2/(2025/12/11)